

## メモ(1) プーチンはどこまで暴走するか？

2022. 04. 10 記す

### 1 ゼレンスキー感動のスピーチ

①4月4日。ラスベガスでグラミー賞授賞式が行われ、ゼレンスキー大統領はビデオメッセージを送った。それはあたかも1片の詩である。

わずか1分20秒と短い、韻を踏み、隠喩に満ち、凝縮された言葉で参加者の心を打った短いスピーチの背後に、彼のアートの資質が垣間見える(以下のスピーチは、日野江都子さんの和訳を参考に筆者が抄訳した)。

戦争。廃墟となった街並みと死者たちの沈黙……。それは音楽とは対極にあります。

音楽家たちはタキシードではなく防弾着を着ています。彼らは病院でけが人に向かって歌っています。聞こえない人たちにも向かって。

われわれは自由を守ります。生きるために。愛するために。音楽を奏でるために。

われわれはロシアと戦います。彼らの爆弾は恐ろしい静寂をもたらします。死の静寂です。静寂をあなたたちの音楽で満たしてください。今日、われわれの物語を伝えるために。

SNS やテレビで、戦争の真実を伝えてください。どんな方法でも構いません。しかし、沈黙するのはやめてください。

皆さんが沈黙しなければ、やがて平和が訪れるでしょう。戦争が破壊したわたしたちの全ての都市に。

②ゼレンスキーは暗殺を避けるために転々としながら、土囊<sup>どのお</sup>に囲まれて仮眠をとる日々には違いない。過酷な生活の中で、相手ごとに内容を変え、話し方を変え、各国に次々とビデオメッセージを送った。動画やSNSを通じて国際世論の渦を巻き起こし、情報戦でロシアを圧倒した。戦争の行方を変えた。驚くべきコミュニケーション力である。

ここに彼の卓抜なリアリストとしての一面が如実に表れている。プーチンには予想できな

い斬新な手法である。

③ゼレンスキーのネットを駆使力は、すでに大統領選挙の時から明らかだった。伝統的な政治集会や討論会には挑まず、インターネットで戦って草の根の圧倒的支持を得た。

日本では「コメディアン上がりのタレント大統領」と揶揄<sup>やゆ</sup>されているが、ただのコメディアンではない。タレント時代は、政治風刺ドラマを通じて、ウクライナ社会の腐敗を徹底して描き出した。

喜劇の本質は風刺にあり、風刺は自由な心、透徹した目で世俗を見るところにある。彼はむしろ「喜劇役者」と呼ぶにふさわしい。

## 2 これからの3つのシナリオ

①ウクライナ戦争は今後どう展開するか？ 戦線は日々刻々変わるが、その意味を正確に評価することは不可能である。ウクライナ戦争が今後どう展開するかは誰にも予測できない。

ただし、中西寛教授（京都大学）の提案する3つのシナリオは、一応の参考となる（2022年3月31日日本経済新聞。言葉遣いを1部変更した）。

- (1) 戦火拡大のシナリオ
- (2) 休戦/和平のシナリオ
- (3) プーチン失脚のシナリオ

（注）なお、戦線がこう着状態となる可能性が最近強まってきた。そうなれば第4のシナリオとして「長期戦のシナリオ」も考えられる。ここ数週間のウクライナ東部での戦闘が、ターニングポイントになる。

②戦火拡大のシナリオが、当面、最もありそうなシナリオである。

欧米のウクライナ支援とロシアの反発の結果、戦火は拡大し激化する。すでに総力戦の様相を呈し始めている。どこでとどまるかは、予測しがたい。

戦火がさらに激化した場合、プーチンは「小型核」を使用するか？ この点は後述する。

③現時点では、休戦/和平のシナリオは遠のいたように見える。戦闘の行方しだいが、休戦が成立しても一時しのぎの便法に終わる可能性が高い。

トルコ、中国、インドなどの仲介で、仮に休戦したとしても、現状維持が前提となろう。

それは「偽りの休戦」である。

ロシアが占領している地域の帰属をめぐる、紛争はくすぶり続ける。和平に至るまでは十年単位の長く困難な道が待っているのではないか。

④プーチン失脚の可能性は、現時点では低い。

少人数による暗殺/毒殺から、政権の内部崩壊、政権転覆といろいろな可能性が考えられる。しかし、仮にプーチンが失脚しても、その後ただちにロシアの政情が安定する可能性は極めて低い。

民主主義国家と異なり、プーチンの対抗勢力は育っていない。独裁者が失脚した後は、民族主義や自由主義的勢力が入り乱れ、「内乱」に近い政治的/社会的混乱がもたらされることが多い。「アラブの春」を始めとして、多くの先例の示すとおりである。

そうなれば、プーチンの失脚も戦争の終結につながらない。ロシアは流動化し、世界の不安定要因となるのではないか。

### 3 戦火拡大のシナリオ

#### ①プーチンの誤算

現在、ロシア軍は誤算続きで一時的な「軍事的苦境」にあるという。短期決戦を狙っていたプーチンにすれば思いがけない誤算だったろう。

例えば：

- (1) ロシア軍兵士の予想外の戦死者増加
- (2) ウクライナ戦力の過小評価
- (3) 自軍戦力の過大評価
- (4) 欧米の予想外の激しい反発
- (5) 自軍の指揮命令系統不全

最近、プーチン政権内の不協和音も漏れ始めた。

#### ②ロシア軍の攻撃方法

首都キーウ（旧キエフ）の占領に失敗したロシア軍は、ますます非人道的で酸鼻<sup>さんび</sup>な攻撃手段をとるようになってきた。

たとえば、人を無差別に殺傷する対人地雷（通称「メダリオン」）、クラスター弾、燃料気化

爆弾、IED（道路脇に仕掛ける簡易爆弾）などを多用してきたといわれる。

その他、貯蔵タンクや発電所などのインフラへの攻撃、学校、病院、劇場などの非軍事施設への攻撃、市民への虐殺・拷問・略奪などの報道が絶えない。

### ③欧米の軍事支援

従来、欧米の支援は携行式の対戦車ミサイル（「ジャベリン」）や地対空ミサイル（「スティンガー」）などの小型兵器が中心だった。

戦況の激化・熾烈化を踏まえて、NATO はさらに戦闘用ドローン「スイッチブレード」数百機、装甲車両、対艦ミサイルシステムなどを供与する方針という。

### ④総力戦の様相を呈し始めた

ゼレンスキーは、従来からウクライナ上空の飛行禁止区域の設定に加え、戦車、戦闘機、防空システムなどより大型で攻撃的な兵器の供与を求めている。

欧米には、従来の支援ではロシアの非人道的、戦争犯罪行為を制止できなかったという思いがある。防衛的な兵器では限界がある。欧米の軍事支援は小型で防衛的なものから、大型で攻撃的なものへと拡大せざるを得ない。戦況はしだいに総力戦の様相を呈し始めている。

### ⑤ロシアはレッドラインを超えるか？

最近、ロシア軍が化学兵器（サリンガス、VX ガスなど）や生物兵器（炭疽菌や天然痘ウィルスを利用したもの）を使用することへの警戒が急速に高まっている。

欧米側は「生物・化学兵器の使用はレッドラインを超える」として厳しくけん制してきた。しかし、戦況が思わしくなければ、プーチンはこれらの兵器の使用をためらわないだろう。

### ⑥NATO は飛行禁止区域を設定するか？

仮に、ロシア軍が生物・化学兵器を使った場合、NATO はどう対応するか？

より高度な通常兵器/ミサイルの供給、ウクライナが切望している飛行禁止区域の設定、さらには直接的な軍事介入に踏み切る可能性もないわけではない。

ただ、飛行禁止区域の設定は有力な手段だが、そのままでは終わらない。

ロシア軍機が禁止区域を侵犯して、NATO が本当にロシア軍機を攻撃するかを試すなど、何らかの挑発する可能性は極めて高い。そうなれば一触即発の事態となる。

#### 4 プーチンはいつ「小型核」を使うか？

##### ①ロシアは核兵器の使用をタブー視しない

3月22日、ロシアの大統領報道官は「(ウクライナ戦争で)国の存亡に関わる脅威があれば、核兵器を使うことがあり得る」と、核兵器使用の可能性を認めた。

これを単なる脅しやハッタリたりと受け取るのは、楽観的すぎる。現代の戦争は「小型核」の開発によって様相が一変した。「小型核」使用の可能性を過小評価してはならない。

##### ②小型核という欺瞞

「小型」というといかにも威力が小さい印象を与えるが、広島に落とされた原爆の半分から2パーセント程度のものまで、さまざまな種類があるという。その威力は依然強大であり、放射能の被害も甚大である。

「小型核」という呼び方はゴマカシである。核の威力をことさら矮小化して使いやすさを狙ったとしか思えない(ただ、これに代わる一般化した言葉がないので、ここでは、一応、「小型核」の言葉を用いる)。

##### ③「小型核」は実用的な兵器か？

冷戦時代の核兵器は、あまりに強大すぎて使えなかった。使えば世界の破滅が明らかだった。そこで、ロシア軍は、長い間にわたって、破壊力の弱い使える核兵器(小型核)を開発し、今や「実用的」な段階にあるらしい。

##### ④タブーはなくなったのか？

ロシアでは核使用へのタブーは低くなった。小型核を通常兵器の延長上にとらえ「使えない兵器」から「使える兵器」になったという。

「核兵器は使用するもの」がロシア軍の考えだという。特に、核を地上戦での劣勢を巻き返す手段と位置づけてきたという。(ウィリアム・ブロード記者の2022年3月29日 ニューヨーク・タイムズ)。

##### ⑤ 小型核の非居住地域への投下

ウクライナ戦争の前の話だが、核の専門家であるウルリッヒ・キューン(ハンブルグ大学)は「プーチンは敵軍ではなく、人の住んでいない地域に核兵器を撃ち込んでくる可能性がある」という。2018年の研究で彼は「ロシアは威嚇のために、北海の遠隔地で核兵器を炸裂

させる危機のシナリオを提示している」と述べている(前記ブロード記者の記事による)。

#### ⑥プーチンが追い込まれた時が危ない

プーチンのキーウ短期占領作戦には、大きな誤算があったといわれる。

最近の報道によれば、ロシア軍はキーウ占領を諦め、軍を再編成し、新司令官を任命してウクライナ東部の態勢強化を図っている。

けんどじゅうらい

捲土重来を期した東部での作成に失敗した時が、世界にとって最も危険である。

得られる果実がコスト(失った将兵、戦費など)に見合わず、ロシア国内で政治的に追い込まれると感じた場合、プーチンは「小型核」を使用して、一か八かの局面転換を図る誘惑に駆られるだろう。

#### ⑦悪夢のシナリオ

プーチンが小型核をウクライナの非居住地域に使ったら、欧米はどう出るべきか？

どれも、欧米にとっては悪夢のシナリオである。

- (1) ウクライナは同盟国ではないので、通常兵器の支援を質的にも量的にも増やすが、核による報復はしない。→この場合、ウクライナは戦意を喪失し、ロシアの蹂躪を許すことになる。
- (2) ロシアの非居住地域に対し、(同害報復的な)核による報復をする。→この場合、大規模な核戦争への恐怖から、欧米の政治家たちは急速に市民の支持を失うだろう。
- (3) ウクライナ支援から完全に手を引く。→世界の各地で侵攻/侵略が続発し、欧米は世界での指導力を急速に失う。世界各地で独裁国が跳梁し、世界はディエネストピア(暗黒郷)へと向かう。

#### ⑧「解のない問い」のジレンマ

欧米は、核戦争という「現在の危険」を避けるために、プーチンの脅しに屈するか？

それとも世界がディエネストピア化する「将来の危険」の芽を摘むため、やられたらやり返すか？

「将来の危険」は「現在の危険」より起こる確率が低いように思えるが、進むも地獄、引くも地獄である。欧米諸国は「解のない問い」のジレンマに直面する。

人類はこれほどまでも愚かな状況を、長い間に作り出してきた。恐怖の核の均衡を作り出した人間に、「解のない問い」を乗り越える知恵があるのか？

## 5 「偶発事」はこうして起こる

①戦争では極めてしばしば当事者の予測できなかった事態が勃発し、それが戦争の命運を左右する。いわゆる偶発事(予想外の出来事、予測不能事)である。

偶発事は、第一次世界大戦でも第二次世界大戦でも、戦争のきっかけや行方に大きな(時に決定的な)影響を与えてきた。人間の歴史は、予想もしない偶発事に翻弄されてきた。

②第一次世界大戦は、オーストリアの皇太子夫妻がセルビア人青年に暗殺される「サラエボ事件」がきっかけとなった。

第二次世界大戦は、イギリス首相だったチェンバレンが、ヒトラーに宥和的(弱腰)だったため、かえってヒトラーにつけこまれ大戦を誘発した。

どちらの場合も、まさか世界大戦まで拡大するとは予想できなかった。

③ウクライナ戦争も、何がきっかけで世界戦争に拡大するかは、双方の軍事関係者も予想できない。ベラルーシがゲリラ兵や義勇兵を派遣し欧米がこれに反発するなど、戦火が周辺国に飛び火する可能性も少なくない。さらには、イランや北朝鮮の不穏な動向など、ウクライナの戦争の隙をついて漁夫の利を得ようとする動きが各地で絶えない。

④戦争の発端から終結まで、人間は戦争のような複雑な因果の連鎖をコントロールできない。戦争の行方を支配できると思うのは、愚かな妄想である。

偶発事は頻発したが、それが人類滅亡の大事に至らなかったのは、単なる偶然に過ぎない。人間はそれを理解できず、未来を支配できると妄想して、戦争に狂奔してきた。それが歴史に見る人間という存在である。

## 6 プーチンは「異常性格」か？

①もう一つの大きな予測不能事は、プーチンの精神面である。

米国政府の高官らには、プーチンは裸の王様で「イエスマンばかりに囲まれて不都合な情報が入ってこない」とする見方が根強い。

「(プーチンは)無慈悲で常軌を逸しているが、究極的には合理的な人物であることを期待する」(ライオネル・バーバー氏。英ファイナンシャル・タイムズ前編集長。日本経済新聞2022年4月3日)なども同様であろう。

②「裸の王様」というと、もともとは合理的で計算高い(=正常)人物だが、今回の侵略は判断を誤ったというニュアンスがある。プーチンが正確な情報が得ていたら、合理的な判断をしたはずだ、というわけである。

このような見方は人間への理解が極めて浅い、とわたしは考える。プーチンが狡猾で残酷だが計算高いなら、今後の出方もある程度予測できる。しかし、脳の認知機能に重大な欠陥があるとしたらどうか？　こういうタイプの中には、「何をやらすか分からない」人々がいる。彼らの突飛な行動は常人には予測しがたい。トランプ元大統領もそれに近い。

③独裁者が最も警戒すべきは、食事による毒殺、(ドアのノブなどに塗られた)毒薬との接触である。公表されただけで、過去5回のプーチン暗殺の試みがあった。

ただでさえ、独裁者の日常は極度のストレス下にあり、その精神は荒廃している。

平然と嘘をつく、(残虐行為に対する)罪悪感がない、人の命への無関心、他人の痛みを感じない、自己愛が異常に強いなど、プーチンの認知不全/情操不全を示す兆候は数多い。

精神医学で精神病質、異常性格、人格障害などと呼ばれる症状にあたるのではないか。

「裸の王様」などという生易しい状態ではあるまい。

④プーチンは精神病ではないが、正常な範囲から逸脱している可能性は極めて高い。

この症状は一時的なものではなく、長い期間を経て「人格変容」を起こしたのであろう。

以上がわたしの憶測である。

憶測ではあるが、彼が戦争で失われた赤子、少年/少女、成人、病人、老人などに全く無関心らしいのも、脳の機能の一部不全と考えると説明がつく。

(注) プーチンの言動が、われわたらの社会的規範から大きく外れる異常行動である事ははっきりしている。

ただし、ここでいう「社会的規範」は、現代の先進国のそれであることに注意する必要がある。独裁国や専制体制の国では、プーチンの言動も不問にされるであろう。この点はいずれ考察する。

⑤その他にも、進行性の不治の疾患にかかっているという風説もある。

もしそれが反対派や過激派に漏れたら、政権はたちまち揺らぎ始める。

側近たちでさえ、将来の不安から自分たちの延命を画策するだろう。病状が悪化するにつれ、政権は死に体となり、独裁者は「生ける屍」となる。

⑥権力を専断してきた独裁者にとっては、これほど恐ろしいことはない。無力な自分を想像するだけで、精神は混迷を深めますます常軌を逸していく。病気が被害妄想、疑心暗鬼、破



滅願望などを引き起こし、彼の判断力に影響するなら、これもまた予想外の事態である。  
当然ながら、これは高度な機密情報であり真偽は全く不明であるが、一抹の不安要因ではある。(続く)